

イエスの平和

—「葡萄園の悪しき農夫たち」の譬えを手がかりに—

廣石 望

(日本基督教団代々木上原教会担任教師、
立教大学文学部キリスト教学科教授)

プーチン政権によるウクライナ侵略は、無^む辜^この人々に甚大な殺戮と破壊、そして故郷喪失をもたらした一方で、武力によらない平和を願う世界中の人々に大きな打撃を与えました。新約聖書の福音書は、第一次ユダヤ戦争（紀元 66-70/73 年）の結果、エルサレムのヤハウエ神殿が崩壊した衝撃を、イエスの歴史に重ね合わせて理解しています。そこには平和と暴力の「せめぎあい」があります。私たちが、そこから学べることは何でしょうか？

7 月 16 日、東京 Y W C A 会館およびオンラインにて、キリスト教基盤研究室主催第 3 回聖書に親しむシリーズ「イエスの平和」について、廣石望牧師を講師に迎えてお話を伺い、その要旨をご寄稿いただきました。

イエスの言行と運命について物語る福音書は、第一次ユダヤ戦争（紀元 66-70/73 年）の後に成立しました。それは対ローマ武装独立闘争でした。紀元 70 年、エルサレムのヤハウエ神殿がローマ軍によって破壊され、やがてユダヤ側は決定的に敗北しました。福音書はいわば「戦後の眼差し」を通して、敗戦の 40 年以上前に死んだイエスについて物語ります。そこには、平和への夢と暴力的な現実との「せめぎあい」が見てとれます。

そのひとつが、「葡萄園の悪しき農夫たち」の譬え（マルコによる福音書 12 章 1-11 節）です。物語は、ある人が葡萄園を植園し、農夫たちに託して旅立ちます。収穫期になると、主人は使者を送りますが、農夫たちは小作料の徴収に応じず、次々に派遣される使者たちを繰り返し虐待し、ついには主人の息子を殺害します。イエスは「さて、葡萄園の主人は何をするだろうか？」と聴衆に問い、「彼は来て、農夫たちを滅ぼすだろう。そして葡萄園を他の者たちに与えるだろう」と自答した後に、「家を建築する者たちが廃棄したひとつの石が隅の頭（石）になった」とい

う詩編の言葉（118編 22-23節）を引用します。

現在の物語では「主人」が神ヤハウエ、「葡萄園」がイスラエル民族ないし指導層、派遣される「奴隷たち」は旧約以来の虐待される預言者たち、「愛する一人息子」の殺害はイエスの処刑（紀元 30 年）、主人の報復はユダヤ戦争の敗北（紀元 70/73 年）、そして「隅の頭石」とは復活者キリストをそれぞれ指します。これはユダヤ戦争の敗北を、「神の息子」イエスの殺害に対する神の復讐と位置づけ、同時に復活者イエスにもとづくキリスト教共同体の創設（紀元 30 年代）を基礎づける、救済史的な寓喩（アレゴリー）です。イエスの「死後」に生じたことが、さまざまに読み込まれているわけです。

では、イエス以後の状況に関係する筆致をとり除くことで、寓喩化される「以前」の譬えの原型を見出せるのでしょうか。仮説的に再構成されたプロットラインでは、葡萄園の小作委託という状況設定に続き、危機場面の末尾で、「彼らは私の息子を敬うだろう」という主人の期待と、「息子を殺せば、相続は私たちのものになるだろう」という農夫たちの期待が互いに競り合い、緊張が頂点に達したところで物語がプツリ途切れます。つまり解決場面がありません。

他の多くのイエスの譬えには、思いがけない解決が特徴的です。ならばこの譬えにも、「主人は来て農夫たちに葡萄園を贈り与え、彼らを相続人に指名した」というような解決があったかもしれません。ならず者たちの反抗を主人の善意が克服するという奇想天外な結末は、イエスによる「神の王国」宣教の基本的な特徴によく合致します。またそれは、いまだ武力衝突に至っていない「戦前」世代ならではの平和なイマジネーションです。これに対して、ユダヤ戦争を通り抜けた「戦後」の人々は、戦争暴力を、イエスの平和を拒絶した者たちに対する神の処罰と解釈する他なかったのでしょうか。

ところでキリスト教史の中で、この譬えはユダヤ人全体を「キリストの殺害者」と見なす反ユダヤ主義や、植民地の独立運動への宗主国による武力弾圧を正当化する植民地主義などに、さんざん悪用されてきました。

しかし、詩編の「隅の頭石」の言葉をよく見ると、原始キリスト教を担った人々は、自分たちが暴力と死をその身に受け、神によって「起こされた」者を中核にもつ、つまり「暴力を受けた者たち」の共同体であると理解しています。ならば復活信仰をもつキリスト教は、現代にあっても、戦争や差別などさまざまな暴力に晒される人々の側に立ち続けることで、平和を願うべきでありましょう。